

乳幼児の描画活動に関する一考察

—なぐりがきの活動場面から—

手良村昭子

A Study on the Drawing Activities of Infants

— From Scribble of Activity Scene —

Akiko TERAMURA

キーワード：描画活動，なぐりがき，乳幼児，身体的活動，感覚機能

はじめに

本研究の目的は、乳幼児初期の描画活動、主に“なぐりがき”の活動内容とその指導方法について再検討することである。

ある保育士対象の描画の研究会でアンケート調査を行った結果、乳幼児の描画活動について難しさを感じる事の中で、一番多く出されたものが三歳未満児（以下未満児と称す）の描画活動の内容とその指導であった。アンケートの答えで特に気になったものが次のような回答である。「未満児ということで出来ることが限られている」「何をしてもぐちゃぐちゃになってしまい、どのように指導したら良いのかわからない」などであった。この回答から強く感じたことは、未満児にとって必要な描画活動とはどのようなものであろうか？この時期に描画活動を通して何が育つのか？ということであった。この時期は描画の発達過程から言えば主に“なぐりがき”の段階である。今回この研究で考えて行きたいことは、保育の中で、この過程の子どもたちの表現をどう捉え、何を求めて行くかと言うことである。保育者にとって、子どもたちが持ち帰るための作品を検討することや行事のための作品のアイデアを考えることは、とても重要であることは理解できる。しかし、本来の乳幼児期の描画活動の中で何が大切であるかということ、もう一度検討する必要性を感じた。本研究では、乳幼児の美術教育の意味を踏まえながら、発達に即した未満児の描画活動の内容について再検討するとともに、この時期に描画活動の経験を通して育っていく様々な側面について考察した。

1 乳幼児の描画の発達過程

未満児の描画の発達過程はなぐりがき（スクリブル）の段階である。ここでは、なぐりがきの段階の表現の特徴とその意味について文献や先行研究から考えたい。

① なぐりがき（スクリブル）の段階（1歳前後—3歳）

描画の発達過程の研究は多くの学者が行っている。地域性や時代、環境の違い、さらに研究の対象となった子どもの素質や経験などデータの結果に多少違いがあるが、多くの研究からは、一般的な傾向を知ることが出来る。研究者として有名なローウェンフェルド（Victor Lowenfeld）やリード（Herbert Read）は、なぐりがきの時期をおおむね2歳から4歳ぐらいまでと示しているが、今回は日本の事例で分類している辻（2003）のなぐりがきの段階（1歳前後～3歳前後）を¹⁾参考にした。内容を簡単にまとめると次のようになる。

〈1〉身体運動の痕跡としての段階

たまたま紙に画材（鉛筆やペンなど）がぶつかって、たたきつけられたために偶然に線が描かれたような状態。身体を動かした結果としての線の痕跡が残る段階。

〈2〉描いた痕跡と動作が協応している段階

ものをつかみ、腕を動かし、「印」を目で追うという動作が、まがりなりにも協応しはじめた時、描画が活動として始まる。自分の描いたなぐりがきの痕跡に注意が向き、腕の動作と動きとの協応が起こってくる段階。この段階では、意図的に線描というよりも、行きあたりばつりに、描く行為そのものを楽しんでいるように感じられる。

〈3〉協応の持続と強化の段階

描かれた線が徐々に視覚的に調節され、線の連続性が一つのリズムとして、まとまりをもったものとして表れ始める。ひじ、肩の運動が連動し、視覚がその痕跡に対応することで安定した渦巻き型のスクリブルが形成しはじめる。安定したスクリブルが形成しはじめたことは、単なる身体運動の痕跡であった点や線が、視覚によってコントロールされはじめたことを意味する。

〈4〉紙という場への視覚的な調節の始まりの段階

行きあたりばつりに「印」をつける活動が、視覚と協応し、自らが描き出す線の痕跡とともに、それが印される紙という場にも視覚的な調節が働きはじめる段階。

以上なぐりがきの段階を1～4の段階で示したが、簡潔にまとめるとこの段階は、身体的な探索行動を中心に描画の表現機能を準備する段階と言える。積極的な描画行為、錯綜する線の探求によって、描き出されたものが、保育者や親など周りの大人からの言葉がけによって、他の事物を意味する「形」であることに気づきはじめ、様々なスクリブルを繰り返すうちにそれを徐々に視覚的にコントロール出来るようになり、次の「形の発見・命名の段階」に移っていく段階である。

② なぐりがきの意味

なぐりがきの意味については、清原（1999）の「美術教育試論Ⅱ」から引用したいと思う。

「なぐり描きは乱画、錯画、掻画、スクリブルともいわれる。手を自由に動かすことができる（つかまり立ち）以降に出現する描画活動の出発点になる表現である。視覚のコントロールによって描かれるように思われるが、実際は身体の運動によって引き起こされるもので、なぐり描きはその結果である。両手を自由に動かす事が出来るようになり、たまたま描画材を持ち、手を動かしたところ痕跡が残ったと言うのが始まりである。このような経験の積み重ねが、描画材が描くことができるものであるという学習をさせ、描くことによる生理的満足、表出することへの喜びを感じさせ、以降は自ら描画材をとり、なぐりがきを行うようになる。（略）幼児の描画活動は、発達しながら意味（イメージ）と形が結び付いて表される時期（形象化）にたどり着くのであるが、このような描画活動が発達する時期には描画活動が旺盛なだけでなく、言葉を獲得していく活動も旺盛になる。そして、言葉で表現できないものを描画で表し、認識として獲得し言葉につなげるというように描画、製作活動が言葉の獲得や幼児の認識の獲得と一緒に表れ、生きる力となっていく時期である。それゆえ、なぐり描きの活動が十分されていないと、この時期の活動が滞ることが考えられ、描画や製作の活動が出来なくなるだけでなく、言葉の獲得や認識の獲得も十分できないことにつながり、生きる力を獲得することが不十分になるのである。このようにして人間の知的活動の一つと考えられる描画活動は身体活動から始まるのである。」²⁾

辻や清原が述べているように乳幼児初期の描画、“なぐりがき”は身体活動から始まり、この活動を充分行うことで身体的能力、感覚機能（視覚・触覚・運動感覚）、ものの認識、言葉の獲得と言ったさまざまな能力が育って行くことが分かる。このことより、この時期の描画活動が描画としての活動の枠を超えて乳幼児の発達に深く関係する重要な活動であることがわかる。

2 乳幼児の感覚機能と描画活動

乳幼児の初期の描画は身体活動から始まるということは、なぐりがきの発達段階の内容からも示されていたことである。では、乳幼児の身体的発達、特に感覚機能（視覚、触覚、運動感覚）の発達と描画活動の関係はどのようなものなのかとこのことをここでは考えていきたい。

ローダ・ケロッグ（Rhoda Kellogg）は「児童画の発達過程」（Analizing Children's Art）の中で次のように述べている。「長い間、幼児たちがスクリブルすることから得る基本的な喜びは動作によるもの、あるいは“運動快感”と考えられてきた。それは視覚的快感が基本だと言い直してもよいものである。」³⁾「児童の初期のスクリブル行動にまずあるのは視覚的な喜びか運動の喜びかという問題を取り上げた。そして、視覚的な喜びが少なくとも基本的に重要なものだと結論した」⁴⁾ このように膨大な乳幼児の描画の分析を行ったケロッグが、その初期のスクリブル行為の中で注目したのが視覚的快感であった。このように視覚的な部分を特に重要と捉えていた研

究は多く、R・アルンハイムの場合では、視覚と言うものを限定にして描画の発達を捉えていた。しかし、初期の描画（スクリブル）の発達過程においては、視覚が身体性に先行するものであるとは必ずしもいえないのではないかと思われる。そこで、乳幼児の視覚の動きの特徴と感覚機能の関係について少しふれておきたい。清原（1989）は、乳幼児の視覚の動きと「もの」の捉え方について次のように述べている。「三歳くらいまでは、視覚の動きが「もの」の存在を認めているだけである。それは、視覚が触覚、運動感覚、視覚の融合された感覚の一部あるいは「あることを認める」機能として動いているためであると考えられる。六歳くらいになると、図形というものを視覚によって認識していると言うことも可能になるような目の動きになる。しかしながら、大人の視覚の動きと比べてみると、その動きに完全に差があることがわかる。大人の場合、対象物全体を視覚が「なぞる」、言い換えれば、視覚が視覚の機能だけでなく、触覚の機能も合わせもって働いているともいえるような動きをしていることが伺え、逆にいうならば触覚の機能は形態認知には用いられなくても済んでしまうことを示しているといえよう。これは、幼児が触覚、運動感覚、視覚の融合された感覚によって「もの」を認識していたときと比べると、視覚が優先され他の感覚を必要としない。言い換えるならば、身体性を捨象した「知的」なところで、認識が成り立っていると言うことができよう。」⁵⁾

ここで言えることは、少なくとも三歳児くらいまでの乳幼児の視覚は触覚と運動感覚とが融合されてものをとらえると言うことである。大人とは違い、身体を使い、感覚機能をフルに使っていくことで「もの」を捉える事が出来ということである。

鬼丸（1981）は「描画の行為というものを、単純に一つの感覚作用に帰するのは誤りだ」⁶⁾と述べ、清原も「児童画の場合、広義の触覚性すなはち体性感覚が主導して、他の様々な感覚がその中に、強弱それぞれの違いはあっても融合参与しうることを意味する。」⁷⁾と述べ、乳幼児の初期の描画活動を身体感覚との関係の中で捉えている。筆者もこの研究においては清原や鬼丸の述べているように初期の描画活動（スクリブル）は体性感覚が主導していると考えられる。

以上、乳幼児の描画の発達段階からその特徴について、文献や先行研究から述べてきたが、次に乳幼児、ここでは未満児の描画活動の事例を考察しながら具体的な内容の検討をしていきたいと思う。

3 事例による考察

今回は、家庭的保育事業こどもなーとで行われた描画活動の一つの事例を考察した。

この保育施設は専門の美術教育を受けた施設長がアトリエリスタ（芸術支援士）としても日常的に保育に携わっている。そして、描画活動を設定保育の中の特別なものとしてカリキュラムに位

手良村昭子

置付けているのではなく、日常の保育活動の中でブロックや積木遊びなどと同じように一つの活動として毎日行っていること、またそのような環境が整えられているところに特徴がある。今回検討した描画活動も設定保育としてではなく、好きな遊びが展開される活動の一つとして行われていることを付け加えておきたい。

〈調査方法〉

(1) 実践場所…大阪府内の家庭的保育施設「保育ママこどもなーと豊新」

(2) 観察日時…平成26年10月21日 15時25分～15時50分

(3) 観察対象児

1歳児 男児2名 女児1名

2歳児 男児5名 女児1名

(4) 記録・分析方法

・保育者による活動記録(写真・コメントなど)

・観察者による活動記録(写真・ビデオ分析)

(5) 今回取り上げた事例…「背景紙を使った描画活動」

描画材…黒の背景紙(2720mm幅, 11mロール)クレヨン2セット

活動の流れに関しては資料1にビデオからの記録をまとめた。

資料 1

背景紙を使った描画活動の記録

- ・ 15時25分…アトリエリスタが背景紙を保育室中央に出す。
R君、S子、G君、M君、A君、K君、背景紙に集まり、またがったり、紙を広げようとする。アトリエリスタ「一回降りて」と背景紙にまたがっている子どもたちに声をかける。「テープ貼るよ」子どもたちは、背景紙を離れてテープを持ってきたアトリエリスタの方に行く。そして、紙を貼るのを手伝おうとする。M君とS子は紙の上に座る。R子が来る。アトリエリスタ紙をテープで貼り始める。
- ・ 15時26分…H君、J君が来る。A君はおもちゃの方に行く。紙を貼るのに興味を持っていたのがR君、S子、H君、J君、G君、M君。J君テープを貼るのを手伝う。S子紙の上に座る。R君、H君、紙を広げて行く。G君おもちゃを持ったまま紙の上を歩きまわる。
- ・ 15時27分…アトリエリスタがクレヨンを出す。R君が一番にやってきてクレヨンを取る。次にS子もクレヨン进行をもらう。2人は何か描き始める。S子はどンドンスクリブルする。G君は紙が広げられると喜んで大きく足踏みをする。そして、寝ころぶ。A君が紙の中に入ってくる。R君、K君、H君は紙をどンドン広げて行く。保育士Bはそれを見て「大きいね～」と声をかける。M君、「あいあいあー」と言いながら紙の上を飛び跳ねる。A君も飛び跳ねる。R君も広げた紙のあちらこちらを飛びながら歩く。
- ・ 15時28分…H君、紙の端から力強い丸のスクリブルを描く。H君のスクリブルの上からM君がなぞるようにスクリブルする。H君、丸のスクリブルを紙のはじから中央にかけて次々と描いていく。H君の描いている所にR君が丸のスクリブルを描く。M君は、H君とR君の描いたスクリブルの上になぞるようにスクリブルしていく。
- ・ 15時29分…R君、H君の描いた丸の上を踏んで遊び出す。T君、紙の外でみんなの様子を伺っている。
- ・ 15時30分…R子は紙の上にねころんだり、飛び跳ねたりして遊ぶ。S子はもくもくとスクリブルし続ける。G君はねころんだりハイハイしたりして何か描いてある形を見つけて喜ぶ。M君、H君は自分の描いた丸のスクリブルのまわりを走り回る。アトリエリスタがR君の足の形をクレパスでなぞる。それを見ていたH君がR君の足をクレパスでかたどる。R子とS子も見に来る。R子、自分にもやっというと。アトリエリスタはJ君、R子と順番にクレヨンで足の型を取る。
- ・ 15時31分
T君、友だちの描いたスクリブルを足で踏んでいく。次にクレヨンをとって丸を描き始める。R君は描くより描いたものの上を踏みながら遊ぶことに夢中になる。M君が描き始める。R子がアトリエリスタに身体を形をクレパスで取ってもらい。T君は、丸を描き続ける。
- ・ 15時32分…R君は紙から出て車のおもちゃのほうに行く。H君、自分で足形をとる。G君、車に乗って紙の中に入ってくる。保育士Aが丸を「丸描いて～」と歌いながら描く。K君、R子、H君、寄ってくる。K君が丸を描き始める。
- ・ 15時33分…保育士A、次に「にょろにょろにょろ」と言いながら波線を描く。M君が興味を持って線を見て「てん(せん)～」とさけぶ。H君、保育士の描いた線の続きを描く。S子、その様子をじっとみている。H君、今度は自分でにょろにょろの波線を描き始める。M君、保育士の描く線の上を指でなぞる。H君「にょろにょろにょろ」と何度も言葉を繰り返す。保育士A「H君、にょろにょろ上手でしょう！良いね！自由で！」と言う。
- ・ 15時34分…アトリエリスタが線路を描き始める。A君、T君が興味を示す。T君、アトリエリスタの描く線路や汽車をじっくり観察する。S子、自分で好きな絵を描きながら、時々アトリエリスタの描いているのを見る。A君は線路に興味を示す。M君、T君の顔を見て「あっ！」と言って笑いながら、アトリエリスタの描いた線路の上にスクリブルする。T君、M君の描いた上に加筆していく。(クレパスで会話をしているように加筆しあう。)

- ・15時35分…H君も、線路の方に参加してくる。A君は線路の上に加筆しながら、ハイハイしてまわる。H君、線路の上をクレパスで塗り始める。アトリエリスタは線路を描き足していく。T君、アトリエリスタの描く線路をじっとみている。保育士A、丸のお花を描いていく。J君、「ここも」と言って、自分の描いてほしい場所を保育士Aに伝える。アトリエリスタが線路の絵を広げて行く様子をM君とA君がハイハイで追ってくる。H君アトリエリスタの描いた線路の続きを描き始める。
- ・15時36分…T君、線路の枕木の間に点を描き込んでいく。
- ・15時37分…M君、足の裏がクレヨンで汚れていることに気付く。少し気になるようである。T君、M君が手にしているクレヨンをもぎ取る。M君、気にしていない様子でアトリエリスタに別のクレヨンをもらいに行く。
- ・15時38分…A君、描かれた線路の上を何度も歩いている。そして、次に色のついたプラスチックの長い管のおもちゃ（オレンジ・キイロ・ミドリ・キミドリ・アオ）を4、5本持ってきて線路の絵のところに並べる。G君がそのおもちゃを取る。A君、取り返し、それからはそのおもちゃを持ちながら線路の上を歩いている。T君、保育士Aの描いた、にょろにょろの線の間にもう1本線を加筆したり、点を描き込んだりしていく。
- ・15時39分…M君、「う～」「あ～」と言いながら自分の足の周りに線を描く。G君はひたすらスクリブルしている。
- ・15時40分…G君、T君のところに来て、スクリブルしたりねころんだりする。T君、紙の上を歩きながら余白を見つけて丸を描く。
- ・15時41分…T君、背景紙の巻いてある筒の上に線を引いていく。A君はずっとおもちゃを持ったままで、紙の上を歩きまわる。
- ・15時42分…M君、白のクレヨンで足の裏に線を描いたり、足の周りに線を描いたりして遊ぶ。T君、歩き回って余白を見つけると丸を描いたり、線を描いたりする。
- ・15時44分…M君、黒のクレヨンでスクリブルしているうちに足の裏に黒のクレヨンがつく。それから足の裏に集中して黒色のクレヨンを塗り始める。保育士A「ハハハ～、楽しいね！いいね！まっくろくろになったね！」アトリエリスタ「良いね！」M君「あ～」と言って笑う。保育士A「写真撮ってもらいなよ～」M君、にっこり笑ってもう片方の足にも描いていく。
- ・15時46分…G君が時々スクリブル。A君はおもちゃを持ったまま、紙の上をうろうろ歩いている。ほとんどの子どもが違う遊びを始めている。
- ・15時47分…紙をみんなでまらめて活動終了。

乳幼児の描画活動に関する一考察

〈初期の描画活動（なぐりがき）を展開するための視点〉

未満児の描画活動を展開するためには、その活動を支える、環境構成・展開の仕方・子どもへの関わりに対する見通しが必要である。ここでは、その見通しがプラスの場合とマイナスの場合について、次の表1でまとめた。

表1 未満児の描画活動に対する見通し

	見通しがプラスの場合（活動が豊かで、発展性がある）	見通しがマイナスの場合（活動がマンネリ化して発展性がない）
環境構成	○活動、行為の変化に合わせて場の配置を変えたり、モノ（画材・材料）の選択を考える。 ○環境構成の仕方に工夫がある。	○活動の場、モノ（材料・画材）の準備がいつも同じである。
展開の仕方	○子ども主体の考え方（活動の中で何におもしろさを感じ、どのようなイメージを持って取り組んでいるかに視点が置かれている。） ○活動のプロセスを重視している。	○作品主体の考え方（今日は何を作らせようか） ○目的が作品の完成であって、描画活動としての楽しさや、おもしろさに視点が置かれていない。
子どもへのかかわり	○子どもの活動や行為を認め、言葉がけや援助は活動の展開や発展を支えるためのものであるという考え方。	○活動の中で、どのタイミングで、どのように言葉をかけ、関わったらいいいのか分からない。

4 結果と考察

① 描画活動における子どもの姿からの考察

未満児の描画活動（なぐりがき）が身体の発達をはじめ、他の領域と深く結び付いているという視点から活動の内容を身体的活動、言葉の獲得に繋がる活動、コミュニケーション的行為の3つに分けてその特徴的な場面を取り上げて考察した。

場面 1 描画活動の中に見られた身体的な活動

- ・ G 君は紙が広げられると喜んで大きく足踏みをする。そして、寝ころぶ。
- ・ R 君, K 君, H 君は紙をどんどん広げて行く。保育士 B はそれを見て「大きいね～」と声をかける。
- ・ M 君, 「あいあいあー」と言いながら紙の上を飛び跳ねる。A 君も飛び跳ねる。
- ・ R 君も広げた紙のあちらこちらを飛びながら歩く。
- ・ R 君, H 君の描いた丸の上を踏んで遊び出す。
- ・ R 子は紙の上にねころんだり, 飛び跳ねたりして遊ぶ。
- ・ G 君はねころんだりハイハイしたりして何か描いてある形を見つけて喜ぶ。
- ・ M 君, H 君は自分の描いた丸のスクリブルのまわりを走り回る。
- ・ T 君, 友だちの描いたスクリブルを足で踏んでいく。
- ・ R 君は描くより描いたものの上を踏みながら遊ぶことに夢中になる。
- ・ A 君は線路の上に加筆しながら, ハイハイしてまわる。
- ・ アトリエリスタが線路の絵を描いて行く様子を M 君と A 君がハイハイで追ってくる。
- ・ A 君, 描かれた線路の上を何度も歩いている。
- ・ T 君, 歩き回って余白を見つけると丸を描いたり, 線を描いたりする。

考察 1 …場・空間との身体的なかかわり

保育室中央に背景紙を広げた時に、まず絵を描くと言う行為よりも先に紙の上を、歩く、走り回る、飛び跳ねる、寝ころぶ、ハイハイするといった行為が多く見られた。これは、大人であれば視覚で広さを確認して、大きさを理解するのであるが、未満児の場合は、歩いたり、ハイハイしたり、ねころんだりといった全身で空間と関わることで広さや大きさを確認しているのである。また、単に空間を確認すると言った事だけでなく、普段と違う遊び環境が用意されたことへの興味や嬉しさをこの時期特有の全身で表現するといった形で表れてきていることもわかる。今回のように通常より大きな紙に描く環境を準備すると言うことは、子どもの感覚機能を刺激することにも繋がると考えられる。



写真 1 …紙の上を飛び跳ねる M 君 (1 歳 2 カ月)

考察2…描画の痕跡との身体的なかかわり

描く空間とのかかわりの次に身体で関わっていたものが、線やスクリブルの痕跡とのかかわりであった。誰かが描いたスクリブルや丸の痕跡の上を選んで踏んだり、指でなぞったり、飛び跳ねたりといった行為が多くみられた。これは、描いた痕跡を一つの遊びの素材として捉えているのではないかと思われる。未満児の場合、描く行為が意図的にモノを描くというより、偶然にできた線や形、勢いに任せたスクリブルであることが多い。痕跡として残った形が一つの遊びの素材となって、それが形との出会いであったり、遊び環境の一つとなることが今回の観察でわかった。

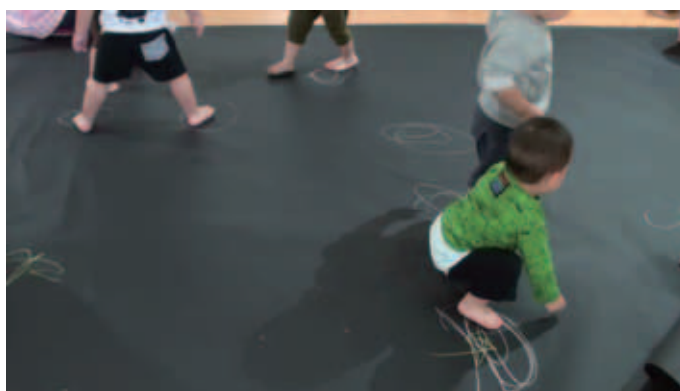


写真2…描いたスクリブルの上を踏んで遊ぶ子どもたち

場面2 描画活動の中に見られた言語的な活動

- ・保育士Aが丸を「丸かいて～」と歌いながら描く。K君、R子、H君、寄ってくる。K君が丸を描き始める。
 - ・保育士A、次に「によろによろによろ」と言いながら波線を描く。M君が興味を持って線を見て「てん(せん)～」とさげふ。
- H君、今度は自分でによろによろの波線を描き始める。M君、保育士の描く線の上を指でなぞる。H君「によろによろによろ」と何度も言葉を繰り返す。

考察3…言葉と形が結びついた描画活動

保育士Aが「丸かいて～」と言いながら丸を描いていく様子を見て、K君が丸を描き始めたり、「によろによろによろ」と言いながら波線を引いていくと、M君が「てん(せん)」と言ってその痕跡が線であることを伝えたり、H君が同じように「によろによろ」と言って波線を描きはじめたりなど、大人がモノを描きながらそのモノを言葉にしていく事は、この時期の子どもの言葉の獲得や形の認識に大きな影響を与えると言うことがこの場面からわかる。日常の描画活動の中で、描いて、見て、言葉を聞いて、形を認識していく経験の繰り返しがこの時期の子どもたちの

発達と大きく関係していると思われる。



写真3…保育士 A「丸かいて～」と言いながら丸を描く。R子（2歳1カ月）も一緒に描く

場面3 コミュニケーションとしての描画行為

- ・H君、紙の端から力強い丸のスクリブルを描く。H君のスクリブルの上からM君がなぞるようにスクリブルする。H君、丸のスクリブルを紙のはじから中央にかけて次々と描いていく。H君の描いている所にR君が丸のスクリブルを描く。M君は、H君とR君の描いたスクリブルの上になぞるようにスクリブルしていく。
- ・M君、T君の顔を見て「あっ!」と言って笑いながら、線路の上にスクリブルする。T君、M君の描いた上に加筆していく。（クレパスで会話をしているように加筆を繰り返している。）

考察4…加筆することでのかかわり

H君の描いたスクリブルの上にM君、R君がなぞるようにスクリブルする。H君とR君が描いたスクリブルの上に今度はなぞるようにM君がスクリブルを重ねて行く。この行為は何か一緒に共通のイメージで絵を描くのとは違い、描くと言う行為を通して、そこに加筆することで友だちとのかかわりを持っているのではないと思われる。ただしこの場面でのかかわりはお互いに加筆し合っているわけではないので一方向の関わりである。

考察5…関わりとしての描画行為

M君がT君の顔を見て「あっ」と言いながら描画活動をしている場面からは、M君はT君といることが楽しいと感じていることが分かる。そして、T君とM君はお互いに加筆をし合っているので、関係性が成立していることが分かる。この場面からは、一緒にいることが楽しいと感じた関係から同じ行為をすることが楽しいと感じるように変化していった場面である。このことから、短い描画活動を通して関係性が育っていることがわかる。



写真4…M君（1歳2カ月）とT君（2歳5カ月）のかかわり

場面4 保育者・アトリエリスタが関わることで発展していく描画活動

- ・アトリエリスタがR君の足の形をクレパスでなぞる。それを見ていたH君がR君の足をクレパスでかたどる。R子とS子も見に来る。R子、自分にもやると言う。アトリエリスタはJ君、R子と順番にクレヨンで足の型を取る。
 - ・保育士Aが丸を「丸かいて～」と歌いながら描く。K君、R子、H君、寄ってくる。K君が丸を描き始める。
 - ・保育士A、「によろによろによろ」と言いながら波線を描く。M君が興味を持って線を見て「てん（せん）～」とさけぶ。H君、保育士の描いた線の続きを描く。S子、その様子をじっとみている。
 - ・H君、今度は自分でもよろによろの波線を描き始める。
 - ・M君、保育士の描く線の上を指でなぞる。
 - ・H君「によろによろによろ」と何度も言葉を繰り返す。
 - ・保育士A「Hくん、によろによろ上手でしょう！良いね！自由で！」と言う。
 - ・T君、保育士の描いた波線の間に線を引いていく。
-
- ・アトリエリスタが線路を描き始める。A君、T君が興味を示す。T君、アトリエリスタの描く線路や汽車をじっくり観察する。S子、自分で好きな絵を描きながら、時々アトリエリスタの描いているのを見る。A君は線路に興味を示す。M君、T君の顔を見て「あっ！」と言って笑いながら、アトリエリスタの描いた線路の上にスクリブルする。H君も、線路の方に参加してくる。A君は線路の上に加筆しながら、ハイハイしてまわる。H君、線路の上をクレパスで塗り始める。
 - ・アトリエリスタは線路を描き足していく。T君、アトリエリスタの描く線路をじっとみている。
 - ・保育士A、丸のお花を描いていく。J君、「ここも」と言って、自分の描いてほしい場所を保育士Aに伝える。
 - ・アトリエリスタが線路を長くつなげて描いていくと、M君とA君がハイハイで追ってくる。H君アトリエリスタの描いた線路の続きを描き始める。T君、線路の枕木の間に点を描き込んでいく。A君、描かれた線路の上を何度も歩いている。
-
- ・M君、黒のクレヨンでスクリブルしているうちに足の裏に黒のクレヨンがつく。それから足の裏に集中して黒色のクレヨン塗り始める。保育士A「ハハハ～、楽しいね！良いね！まっくろくろになったね！」と言う。アトリエリスタも「良いね！」と言う。M君「あ～」と言って笑う。保育士Aが「写真撮ってもらいなよ～」と言うと、M君、にっこり笑ってもう片方の足にも描いていく。

考察6…大人が描くものへの興味

子どもたちは保育者やアトリエリスタの示す描画行為そのものに強い興味を示している。アトリエリスタが線路を描けば、もっと描いてほしいと要求し、次はその描いた形の続きを描いたり、加筆したりと遊びの展開や発展に繋がっている。このことは、子どもが大人とかかわることの楽しさを感じているのと同時に描くという活動そのものにおもしろさを感じているとということがわかる。また、保育士の発する言葉にも敏感に反応し、丸やによろによろなど保育士が言葉と共に描いていったモノに関しては強い興味を示し、模倣したり、言葉を繰り返すなど描画と共に言葉に関しても強い興味を示しそれが言葉の獲得に繋がっていることもわかった。このことから、この時期の子どもの描画活動は、子ども同士自由に活動することも大切であるが、大人との関わりが子どもの活動に大きく影響し発展していく方向となることがわかった。子どもと共に活動を楽しみ、どのようなことに興味を示すのか、どのような刺激や関わり、言葉がけが必要なのかは、その場で感じ取っていく感性が必要なのではないかと今回の事例を通して感じた。



写真5…保育士 A と子どもたち「によろによろによろ」と言って描いて遊ぶ



写真6…T君（2歳5ヶ月）保育士の描いた波線の間に線を引く



写真7…アトリエリスタが描く線路と汽車に興味を示す T 君（2 歳 5 カ月）

考察7…肯定的な言葉がけと活動の発展

M 君が足の裏に黒のクレヨンを塗り始めた時に、保育士 A とアトリエリスタが肯定的な「良いね！」という言葉がけを次々にかけている。M 君は言葉を受け取りながら自信を持って塗る行為を楽しんでいた。この場面からは、大人の肯定的な見方や言葉のかけ方が子どもにとって、その活動の興味を持続させ、一つの経験として次の段階に向かわせていく事が出来るのではないかと、ということが読み取れる。



写真8…保育士 A、M 君（1 歳 2 カ月）の黒く塗った足を見て「良いね！」と声をかける

② 描画活動の展開についての考察

〈1〉未満児の描画活動（なぐりがき）を展開するための視点

ここでは、今回の活動の展開について、先にあげた、描画活動（なぐりがき）を展開するための視点（表1）と照らし合わせながら考察してみたい。

環境構成

こどもなーとで毎日行われている描画活動の場所は、部屋の側面を囲む窓ガラスである。大型の窓ガラスにクレヨンで自由に描く活動が、一日の保育の中で2、3回行われているので、子どもたちは広い場所で身体を使って描画活動をするには慣れている。今回は、床に背景紙を敷くという環境を作ったので、窓ガラスの縦の面ではなく、平面の広い場所での経験となった。描画の画材はクレヨンを使用、子どもたちにとっては使いなれた画材である。この活動は、経験としては二回目であったが、普段と違う描画環境であったため最近描くことに興味を示さなくなっていた子どもたちも参加してきた。同じ描画（なぐりがき）の活動であっても環境を変えたり、画材を工夫することで、子どもたちの興味や活動への集中力が高まり、遊びの発展性が促されることが今回の実践でわかった。

展開の仕方

今回の事例では、紙を広げるという準備の段階から、子どもたちと一緒にすることにより、描画活動としての空間や紙の広さを感じる事が出来たのではないかと思う。そして、そのことが遊びのイメージを広げる事に繋がっていったのではないかと思われる。次に展開の流れから考察してみると、初めのうちは、子どもたちが好きなように思い思いのイメージで遊びを展開していた。しかし、子どもたちだけのかかわりでは、同じことの繰り返しが多くなり、遊びが停滞したり、他に興味に移り始めた子どもも観察された。そのような時に保育士やアトリエリスタがさりげなくかかわる姿がよくみられた。大人が子どもの活動の中に自然に入り、一緒にその世界で遊ぶことで新たな展開が生まれ、子どもたちの興味がさらに深まる様子が観察できた。大人のかかわりの重要さと関わり方のタイミングで活動の流れが良い方に変わっていく事もこの事例からわかったことである。（足型や身体の形を線でなぞる遊び、丸やによるの線を言葉をかけながら描く遊び、線路を繋げる遊びなど）



写真9…R君（2歳5ヶ月）の身体の形をクレヨンでかたどるアトリエリスタとH君（2歳4ヶ月）

子どもへのかかわり

今回の活動は、環境設定をした後は、子どものやりたい方向に向かって進めている事が良くわかる。この時期の子どもたちは、興味の向く方向が様々であるため一人ひとりの行為に目を向けて、関わっていく事が重要である。背景紙という共通の描画環境の中で、思いやイメージ、遊びの中でのおもしろさの部分は様々であったが、その楽しさを一つ一つ拾って保育者も楽しんで関わっていたことが記録から読み取れる。また、言葉がけに関しては、「良いね」という肯定的な言葉がけが何回も出てくる。逆に「ダメ」「～してはいけません」といった否定的な言葉がほとんど出てこないことがわかった。このことから、保育士やアトリエリスタが子どもに対して肯定的なイメージでこの活動にかかわっていたことがわかる。

5 まとめ

なぐりがきの描画活動について事例を通して考察してきたが、この時期の子どもたちの描画活動が身体を使って、スクリブルをするという行為そのものに意味があるということ、そしてその行為が描画活動の枠を超えて、身体的、言語的、関係性の発達に繋がっていく活動であることもわかった。発達過程によって、その行為の楽しみ方は少しずつ違いはあるが、その時期のその行為が発達にとって大切なことであることがわかった。一歳児の子どもたちは、クレヨンをもって手を動かすと偶然できた痕跡に興味を示し、またスクリブルをして痕跡を重ねて行くことが多い。今回の活動を見ているそのような場面は多くあった。一歳児の子どもにとって、偶然の痕跡はその回数が多ければ多いほど偶然が必然となって自分の意思でスクリブルを楽しむようになるのである。また、全身を使ってスクリブルをするということで初期の描画活動が身体的な機能の発達に繋がることもわかった。二歳児になると、ある程度、自分の意思でスクリブルや形を描くようになるので、空間を見ながら丸を描いたり、意図的に描いてある形に加筆をして楽しんだりしていく姿がみられた。友達の描いた形に加筆することも多くあったが、興味を持って加筆していたものは大人の描いた丸や線、線路やお花と言った自分たちの知っているものである。加筆や模倣といった行為を遊びの中で繰り返すことで、より多くの形を獲得していくのであろう。その時に保育者など周りの大人が例えば、今回の事例のように「丸かいて～」や「にょろにょろの線だね」「線路だよ」などと言葉と共に関わっていくことで、形と言言葉が結びつき認知の発達にも繋がるということが今回の事例の考察からもわかったことである。未満児クラスの場合、描画活動が特別の活動として設定保育の中でだけ行われていることが多い。描画活動を保育者が「何か描かせよう」「作らせよう」と考える活動だけになれば、確かに活動はマンネリ化してしまうであろう。これは活動の見通しとしてはマイナスの見通しである。作品の完成にだけ目を向けるのではなく、描画行為そのものに目を向け、描画活動の中にある子どもの育ちの可能性を知ることが

手良村昭子

この時期の子どもたちにとって、本当に大切なことなのであると言うことが今回の考察で示された。今回は一つの事例で考察を行ったが今後はまた別の環境構成の中での描画活動(なぐりがき)の事例を考察しこの時期にふさわしい描画活動の内容について研究を続けて行きたいと思う。

最後にこの研究に協力して頂いた家庭的保育事業こどもなーとのアトリエリスタの方、保育士の方々、子どもたちに深く感謝を申し上げる。

引用文献・参考文献

- 1) 「子どもの絵の発達過程」辻政博 2003年 日本文教出版 p28～38
- 2) 「美術教育試論(Ⅱ)ーリアリティーと表現そして時間ー」清原知二 1989年 大阪信愛女学院短期大学紀要p11
- 3) 「児童画の発達過程」ローダ・ケロッグ 深田尚彦訳 1971年 黎明書房 p11
- 4) 「児童画の発達過程」ローダ・ケロッグ 深田尚彦訳 1971年 黎明書房 p259
- 5) 「美術教育試論(Ⅱ)ーリアリティーと表現そして時間ー」清原知二 1989年 大阪信愛女学院短期大学紀要p11
- 6) 「児童画のロゴスー身体性と視覚」鬼丸吉弘 1981年 勁草書房p105
- 7) 「幼児造形教育の基礎知識」花篤實・永守基樹・清原知二 1999年 建帛社 p38